

弟妹の誕生に対する幼児の反応に関する一研究

— その経過と母親の対応を中心に —

塩谷純子

I. 問題と目的

弟妹の誕生は、長子にとって、家族の注目を集めて親の愛情を一身に受けている幼児期に起こる大事件である。弟妹の誕生によって、長子は、親の愛情を弟妹に奪われたと感じてやきもちをやいたりし、次子に対して嫉妬をするようになる。そして、その結果、赤ちゃん返りの行動を示したり、反抗的になったりする、ということがよく知られている。また、幼児は逆に次子を愛し、かわいがる行動をおこしたりもする。弟妹の誕生によって、長子には様々な反応や変化がおこるとされる。本研究においては、まず、天富・池永・岩橋・阿部(1993)の研究を参考にしながら、弟妹の誕生に際しておこる、幼児の様々な反応や変化の出現時期や出現率・経過について調査することにした。

次に、第2子出産直後の母親が2人の子どもに対して抱く気持ちを探ることと、弟妹の誕生に際して様々な変化(赤ちゃん返り・神経性習癖)を示す幼児に対する対応の仕方について考えることを本研究の目的とした。母親が子どもに対して抱く気持ちとしては、それぞれの子どもに対する母親愛着に注目した。これまでの研究は、子ども側からの母親に対する愛着を研究対象としており、母親から子どもへの愛着については十分な検討はなされていない(大日向, 1988)。本研究では、柏木(1995)が、親の子どもへの愛着として述べる「自分の子どもに対する親の特別な関心・かわいと思う気持ち」を母親愛着と定義することにす。また、弟妹の誕生に際して生じた長子の赤ちゃん返りや神経性習癖に対する母親の対応の仕方としては、親の態度の受容—拒否の側面に注目した。そして、受容—拒否の態度については、牧田(1969)を参考に、A子どもに対して愛情をもっているか(愛情)、B子どものありのままを受け容れるか(狭義での「受容」)、C子どもの気持ちを理解するようにしているか(理解)、の3つの観点に注目していくことにした。

II. 方法

同胞2人の乳幼児をもつ家庭の母親を対象として、愛知県内の3箇所の3～4ヶ月児健診会場で配布し、郵送で回収する方法で質問紙調査をおこなった。天富他(1993)・森下他(1988)・牧野(1982)・永田他(1996)を

参考に、長子の反応(弟妹に対する長子の関わり方)や長子の変化(それまでにはない長子の行動)と、長子の変化に対する母親の気持ちや行動、そして母親愛着(長子に対する母親愛着・次子に対する母親愛着)に関する質問紙を作成し、実施した。調査は、第2子誕生後、3、4ヶ月後(以下『3ヶ月後調査』と略す)と6、7ヶ月後(以下『6ヶ月後調査』と略す)の2回、同じ内容の質問紙を用いておこなった。『3ヶ月後調査』の回収率は62.2%で、調査の目的から、長子の年齢が就学前・次子の年齢が3～5ヶ月のものを有効とし、最終的に130名の有効回答を得た。『6ヶ月後調査』は、『3ヶ月後調査』に回答したもののうち、『6ヶ月後調査』への協力を希望した87名に配布し、67名(回収率77.0%)より回収した。

III. 結果と考察

1) 長子の変化の出現時期・出現率・経過について

弟妹の誕生に際して生じる長子の「赤ちゃん返り」や「神経性習癖」の行動の出現時期は、次子の妊娠後期から出産直後にかけてが多かった。また、散らばりが大きく、妊娠初期からみられる人や出産後しばらくたってからみられる人もいた。妊娠後期には、母親のお腹が大きくなり長子との関わりが以前のようにできなくなることや、出産時期に母親と分離することが関連していると予想される。

各項目の出現率には差がみられ、「赤ちゃん返り」を問う項目では、7～8割にみられる項目もあり、全体的に出現率が高かった。また、「神経性習癖」は1～4割にみられた。

次子の誕生後、3、4ヶ月の時点でみられた長子の「赤ちゃん返り」や「神経性習癖」の行動は、次子の誕生後6、7ヶ月後には、多くの項目において半数以上の人が減少または消失していた。

この結果から、弟妹の誕生に際して生じる長子の「赤ちゃん返り」や「神経性習癖」は、多くの子どもにみられること、出現の時期としては、妊娠後期から出産直後にかけてが多いことが分かり、その後は減少・消失していくことが多いと考えられた。

2) 母親の気持ちについて

質問紙のうち、長子の反応・変化、母親愛着の各項目について『3ヶ月後調査』と『6ヶ月後調査』のそれぞれにおいて、因子分析をおこなった。長子の反応尺度(8項目)からは「肯定的反応」尺度・「否定的反応」尺度、長子の変化尺度(20項目)からは「赤ちゃん返り」尺度・「習癖」尺度、母親愛着尺度(24項目)からは「長子愛着」尺度・「次子愛着」尺度の各下位尺度を得た。各尺度のきょうだい構成別の平均の差を検討した結果、差が小さいため、全てのデータを合わせて分析をおこなった。

「長子愛着」尺度と「次子愛着」尺度のそれぞれの平均を求め、平均に差がみられるか検討した。その結果、『3ヶ月後調査』(「長子愛着」尺度平均34.86(6.28)・「次子愛着」尺度平均40.26(5.93))においても『6ヶ月後調査』(「長子愛着」尺度平均36.19(6.28)・「次子愛着」尺度平均39.63(4.81))においても、「長子愛着」尺度の方が「次子愛着」尺度よりも有意に低いという結果になった(()内の数値は標準偏差を示す)。次子出産直後の時期に、母親は、長子よりも次子に対してより強い愛着を抱き、かわいいと感じている。また、次子よりも長子に対して、強く育児不安を感じていることが分かった。さらに、『3ヶ月後調査』と『6ヶ月後調査』の結果を比較すると、この3ヶ月の期間に、「長子愛着」尺度は高くなり、「次子愛着」尺度は低くなり、長子と次子に対する愛着の差は少なくなっている。この結果について、3ヶ月の期間を経て、長子の様々な反応や変化、とくに「赤ちゃん返り」尺度が減少していることや、この時期には、次子に対しても手がかかるようになり、次子に対する母親の疲労や不安が高くなることと関連しているのではないかと考えられた。第2子出産直後の母親は、長子よりも次子に対する愛着が強いことが分かり、その後時間の経過につれて、長子に対する愛着と次子に対する愛着の差は少なくなっていくと考えられた。

次に、「長子愛着」尺度と、「否定的反応」・「赤ちゃん返り」・「習癖」尺度の間の相関係数を求めた結果、負の相関がみられた($r = -.19 \sim -.42$)。長子の次子に

対する否定的な関わり(たたく、おもちゃをとるなど)が多い場合や、赤ちゃん返りや神経性習癖の行動を多く示す場合には、長子に対する母親愛着は弱いことが分かった。この時期の長子に対する母親愛着は、弟妹の誕生に際して生じた長子の反応・変化の多少と関連があると考えられた。

3) 母親の対応の仕方について

母親の対応の仕方は、長子の「赤ちゃん返り」や「神経性習癖」の行動に対する母親の気持ちや行動について自由記述で回答を求めた。そして、A愛情、B狭義での「受容」、C理解、の3つの基準から、受容—拒否の態度に分類した。

長子の行動が「神経性習癖」の場合には、「赤ちゃん返り」である場合に比べて、母親は拒否的な態度で接することが多かった。とくに要素のBが異なり、母親は、長子の行動が「赤ちゃん返り」の場合には、暖かな感情を向け受け容れるが、「神経性習癖」の場合には、ありのままを受け容れることができず、そのような行動をやめさせようとするのが多かった。

次に、長子の「赤ちゃん返り」や「神経性習癖」の行動の継次的変化に母親の態度がどう関わるかについて検討した。長子の「赤ちゃん返り」や「神経性習癖」の行動は、それに対する母親の対応が受容的であろうと拒否的であろうと、時間が経過すると減少していくことが分かった。阿部(1997)は、「小児期のいわゆる問題行動の半数以上は一過性のもの」であり、自然によくなくなるものが多いと述べている。これらの長子の行動に対する母親の態度が、受容的であろうと拒否的であろうと、自然に消失していくということが予測される。そして、長子の「赤ちゃん返り」に対しては、母親が「受容的な態度」で接し、愛情を注ぎ、その行動を受け容れ、長子の気持ちを理解することによって、早く減少していくことが分かった。また、補足的な分析をおこなった結果、長子の「神経性習癖」に対しては、母親が積極的な対応をせずに放置することによって、減少していく可能性があると考えられた。